日本文学研究資料新集 23

佐藤春夫と室生犀星

詩と小説の間

佐久間保明・大橋毅彦 編

有精堂

ISBN 4-640-32528-2

日本文学研究資料新集

23 佐藤春夫と室生犀星
詩と小説の間

1992年11月5日　初版発行

編　者　佐久間保明
　　大橋毅彦
発行者　山崎　誠

発行所　有精堂出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町1－39
電 話 03(3291)1521(代)
振替口座　東京 9-40684

printed in Japan　ISBN 4-640-30972-4 C 3391

『日本文学研究資料新集』（全三十巻）刊行に際して

日本文学の研究は、戦後四十余年を経て、隆盛に向かうかたわら、再検討と新しい方法への模索が様々に試みられております。情報化時代といわれる現在の状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。小社ではそうした要請に答えて、『日本文学研究資料叢書』（全百巻）を刊行して、学界ならびに各方面から多大の御好評をいただきました。

右叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効に提供することを目標としたものです。こうした趣旨を継承しつつ、小社は新たにテーマ中心の論集として『日本文学研究資料新集』を刊行いたします。本集では各巻ごとにテーマを掲げ、より深く研究対象を掘り下げて、今後の研究の進路を導く羅針盤ともなることを切に念願しております。

今や国文学界においても、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、情報の氾濫が真の学問的交流の支障をきたすかのごとくになっているようにさえ見えます。そうした錯綜の上に、尨大な著作・雑誌・紀要等が続々刊行され、それらのうちのいくつかは、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったような、種々の困難が重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした状況の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本集は効果的な役割を果たす決意で新たに刊行されるものです。

日本文学の研究者、特に未来に伸びようとする若い研究者に、本集の趣旨が理解され、支持されて、永続的な事業として継続刊行されていく力を与えて下さるように願ってやみません。

有精堂出版株式会社

目　次■佐藤春夫と室生犀星・詩と小説の間

佐藤春夫

春夫文学の《胎動》・・・辻本雄一・1
——「自然主義」思想からの出発——

「西班牙犬の家」の本文について・・・佐々木充・18

佐藤春夫「西班牙犬の家」の謎をめぐって・・・河村民部・39
——比較文学的に読む——

佐藤春夫における絵画と自我の問題・・・原仁司・52
——「田園の憂鬱」成立の前景——

『田園の憂鬱』論・・・高橋世織・69

佐藤春夫『殉情詩集』・・・中村三代司・80
——成立過程における編集意図を中心に——

『都会の憂鬱』論・・・佐久間保明・96
——日かげ者の真意——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

佐藤春夫「F・O・U」論・・・海老原由香・113

室生犀星

『抒情小曲集』の主題と方法・・・三浦仁・125

踊りつつ坂を上る人・・・大橋毅彦・144
——室生犀星の小曲集時代についての一考察——

犀星初期リズム論の形成と展開(一)・・・宮木孝子・159

『寂しき都会』小考・・・杉浦静・166

『四季』における『抒情小曲集』・・・阿毛久芳・176

犀星詩における〝山〟の座・・・竹内清己・185

室生犀星の小説・・・加賀乙彦・196

室生犀星稿（二）・・・大塚博・207
——「結婚者の手記」と二つの系譜——

「あにいもうと」の成立・・・東郷克美・221
——その一側面——

〈物吉繁多〉という男・・・大橋毅彦・238
——室生犀星「杏っ子」からの一問題——

◇

解　説・・・佐久間保明
大橋　毅彦・251

参考文献・・・佐久間保明
大橋　毅彦・261

◇

執筆者一覧・・・268

春夫文学の《胎動》

――「自然主義」思想からの出発――

辻本雄一

はじめに

佐藤春夫の文学的出発が、これまで明星派風和歌からの出発ということで、いとも簡単に片付けられてきたきらいがある。春夫自身の、後年の種々な回想を頼りにする限り、無理からぬところがあるかも知れぬ。しかし、地方の文化状況をひとつひとつ拾い集めてみると、違った様相が現われ出てくる。

上京前の春夫を考えてみるとき、春夫自身が新宮の知識人たちの間で、次第に特異な地位を現出してゆく経過は疎かにできないし、同時に、春夫がいまだ中学生であった事実も看過できない。もちろん、〈大逆事件前夜〉の新宮、ということも十分考慮されねばならぬだろう。

私は春夫文学の〈胎動〉をさぐるうえで、『会誌』六号に発表された「若き鶯の子」の詩に注目する。「若き鶯」に托された春夫の意気込みは、若者特有の気負いだけでは無いはずであり、孤独な心境も、それまで歩んできた春夫の足取りを逆照射しているはずであった。「明治42年12月9日稿」の製作日付が記されている。

これより一年前、春夫は「革命に近づける短歌」（明41・12・18付「熊野実業新聞」）を書いて、強く短歌の革新を訴えていた。

私が春夫文学の〈胎動〉として位置づけるのも、この「革命に近づける短歌」の背景を考え、「若き鶯の子」の成立へ、と連続させて捉えようとするひとつの試みに過ぎない。

春夫にとって決定的な意味をもつ（中央文壇への通路が拓かれたということ、文学志望の決意が、上級学校を断念するなかで、より自覚的になったということ）講演会登壇とそれによる無期停学事件、さらに私が先に紹介した試作群（『日本文学』一九八〇・四号に載せた戯曲「寝ざめ」及び、同人雑誌『燔祭』12号に紹介した小説「転宅」「転任」）は、すべてこの一年に集中している。

あえて結論めいたことを先に述べれば、〈胎動〉を正確に聞きとったとき、いわゆる「傾向詩」が書かれ、「生活人」が標榜される

春夫の一面が、意外と直截的な形で導き出せるのではないかという気が、私は頻りにするのである。

1

まず、明治四十一年夏の、復刊『はまゆふ』と春夫との係わりから述べてみたい。

復刊『はまゆふ』（第二巻第一号）が発行されたのは、明治四十一年八月十日であった。編輯兼発行人は和貝彦太郎、発行所は「濱木綿社」となっている。

「濱ゆふ」と題する与謝野寛の歌五首が巻頭を飾り、和貝夕潮（彦太郎）の「蘇生の辞」が続く。夕潮は言う。

潮の光、峰の緑、近く薫ずる熊野の一日。／砂に埋れし浜ゆふの甦らんとして、声あり。／曰く、『詩は終生の事業なり。一時の道楽に／非ず、』と。／まさに是れ天外の福音！／吾等は名無き数多の詩人と共に此の福音を／楽まんとす。／浜ゆふは甦れり。／あゝ天外の福音！／吾が師、与謝野寛先生の深きみ教こそげに／浜ゆふの生命なれ。

「予の観たる自然主義」を成江醒庵（秀治）が書き、「無題雑録」を大石禄亭（誠之助）が書いている。京都から徳美夜月（松太郎）が「碧梧桐の句」を送ってきている。他に、幾人かの小文と、浜木綿社詠草の短歌と、吹雪会の句作とがその内容である。

『はまゆふ』一号に、春夫が「佐藤潮鳴」の名で、和歌九首と、「馬車」「食堂」の二つの詩を発表していることはよく知られている。鳥と猿とを図案化したセピア一色の表紙が、春夫のデザインであることも有名である。[1]

巻末の、編集後記にでもあたる部分の「熊野鳥」らんは、「梟の子」と「鼻の人」の執筆になっているが、前者が和貝夕潮、後者が佐藤春夫であることは、すでに夕潮の回想（『熊野誌』十二号・特輯文豪佐藤春夫）にある。中央文壇への眼配りが面白い。

▼有明の本然主義がある、泡鳴朝臣の表象的自然主義がある。詩にも種々あるものだ。大賣り出しか知ら？　所で今に默念主義と云ふ奴が盛んになるのさ。も一つこれは希望だが「はきだめ」「こひざめ」じやないよ＝とでもゆふ新體詩雑誌を欲しいものだ。

▼泡鳴の詩中に「テブルの上」とゆふ句があつた。そこらの俳人のチャー（茶）の花と同格だ、それとも「テブル」といふものが別にあるのだらうか。

▼元來泡鳴の誌（ママ）は文字上に於て、生硬な用語や、熟練を缺いた造句が多い様に思ふ。これが表象詩の特色かも知れぬ。吾輩門外漢は、唯々沈默を守るより致し方がない。

▼しかし彼の詩は兎に角、小説は確に成功して居る。不味いとゆふ點に於て（鼻の人）

（全集未収録・原文のまま、旧漢字を使用）

『はまゆふ』復刊を主宰したのは和貝夕潮であったが、春夫が片腕となって協力したさまがよく分る。むしろ春夫が積極的で、先輩の夕潮を担ぎだした気配すらある。当時、新宮中学四年生である。

春夫個人というよりも、春夫を含めた若い力の擡頭と言い換え

てもよい。下村悦夫（紅霞、本名は悦雄）、中野緑葉（本名は匡吉）、梅田酉水（本名は米三郎）、奥愁羊（あるいは愁洋、本名は栄一）、坪井紫潮（本名は英一）らの人々で、『みどり葉』出身、和貝夕潮のもとで短歌を学んでいた。彼らも、多かれ少なかれ俳句との関連をもっていたようだが、次第に短歌に移っていった様子は、次の中野緑葉の回想（『朱光土』一号・大12・6「熊野歌壇の回顧」）に詳しい。和貝夕潮も、芦風の号で句作も続けていた。

廻覧雑誌から謄写版に発展した『みどりば』が第二号を出す頃から、和貝氏の宅で短歌会が催されるやうになつた。勿論和貝氏を主宰とし、その作歌は一斉に明星派の流れを汲んだものであつた事はいふまでもなかつた。短歌会は、毎週土曜日乃至日曜日の夜、欠かさず催されたがこの頃夕潮氏の宅に参集したのは下村紅霞、佐藤春夫、坪井紫潮、奥栄一、鈴木白花、鈴木夕ざめ、岩尾莓村、岩城芦月の諸氏で、この外に一度顔を見せた限り来なかつた人に永広柴雪、東曙夢の両氏が居る。

新宮の歌人たちの明星派短歌への傾斜は、明治三十九年十一月の与謝野寛の来熊であったといっても過言ではない。[2] 復刊『はまゆふ』の巻頭を飾った寛の五首も、その折の歌であった。将来を嘱望されていた三人の青年歌人、吉井勇、北原白秋、茅野蕭々を同行してもいた。

伊勢から熊野へかけてのこの旅は、翌四十年の『明星』に各人の詩や歌となって現われている。

新宮中学五年生であった和貝夕潮も、これを機会に新詩社加入を決意した。夕潮の和歌七首が新詩社詠草らんに載るのは、翌年の『明星』三月号で、新社友として紹介もされた。同号には、東京の太田正雄（木下杢太郎）らも新社友として紹介されている。

和貝は、明治四十年三月新宮中学を卒業し、まもなく新宮男子高等小学校に奉職する。

中野緑葉や坪井紫潮を中心にした回覧雑誌が、師和貝の梃子入れで、月刊の謄写版『みどり葉』に変身するのがいつのことなのか、いまにわかに断定し難いが、明治四十年夏以後のことではなかったか。外部から、[3] 中学生佐藤春夫、奥栄一が加わるのもこのときである。

先の中野緑葉の回想にあった夕潮宅での短歌会も、『みどり葉』二号の頃からというから、四十年夏以後の状景ということになろうか。

『明星』明治四十一年七月号に、春夫の歌が、石川啄木の撰で載ったことはよく知られているが、「風」の題詠で掲載されたのは春夫だけではなかった。それは次のような順序で載り、夕潮宅での短歌会の十分なる成果であった。

にごりたる水なにごとか罵りて風にさからひ海に押しゆく　下村　紅霞

わが燈火（ともし）七たび明りあなあはれ七たび消えぬ風もなけれど　佐藤　春夫

斧うつをゆるさぬ天の老木に攀ぢなむとして大風に落つ　奥　愁羊

中野　緑葉

七つの灯消えつ明りつ夏の夜の涼風かよふきざはしをゆく
　　坪井　紫潮

わが胸の木々の病葉おもひでの風ふくごとにかなしみて鳴る

春夫は「詩文半世紀」のなかで、「わたくしは時々に詠み捨てた幾首かを浄書して雑誌『趣味』の歌壇（選者はたしか窪田空穂氏ではなかつたかしら）に投稿して、必ず幾首かは採つてもらえる常連になつた。これがわたくしのものの活字になつたはじめてである。もつとも田舎新聞や校友会誌は別として、また明星などにもわたくしの歌が出たこともあつたが、そのころわたくしは明星には投稿しなかつたから、当時のわれらの歌の指導者が選択の上で会の詠草として寄稿したのかも知れない。」と述べているから、和貝独自の判断による投稿であったのだろう。

ただ、ここで、明星派隆盛の新宮の歌壇のなかで、あえて『明星』に投稿しなかった春夫の態度は注目される。恐らく春夫の投稿舞台は『趣味』であり、意識的に『趣味』を選んだことが重要なのであり、内的要請も作用していたに違いない。言うまでもなく『趣味』は、『早稲田文学』の姉妹誌といってもよく、自然主義的風潮を色濃く反映している雑誌であった。

和貝宅での短歌会は、「白鳥吟社」と名づけられ、随時、地元新聞にその「詩稿」（短歌）が掲げられている。

『みどり葉』が、復刊『はまゆふ』の前身であったことは確かである。しかし、和貝が目論んだのは、自分と同世代の歌人成江醒庵ら（うしお会グループ）に、若く擡頭してきた『みどり葉』[4]の歌人たちを結びつける形での、『はまゆふ』復活であった。当時の新宮の文化状況からすれば、ごく自然な成りゆきでもあったのだろう。それが、うまくゆかなかったのは、あらためて述べるように、春夫らの和貝への〈造反〉にあった。

2

この年（明治41年）の末、春夫は「革命に近づける短歌」を発表している。講談社版全集にも収められていて（十二巻P468）、初期文章では知られていながら、この短文のもつ意味についてはほとんど看過されてきている。

春夫は、三木露風が『文庫』紙上で「覚醒せざる短歌」という語で現今短歌を批評し、与謝野寛と応酬があったことに触れ、「露風、寛両氏は年令としては僅に十数年の相異にすぎない。然して其思想に至つては恐らく十数年の相異ではないであらう。」と言う。さらに続けて、「然して新しい時代の一部の青年は日々強い文明の圧迫を感じて批評的となり神経過敏となつた。冷やかな理性と若々しい青春の感情とはこゝに一種恐ろしく病的なる複雑なる思想を生んだ。……悪思潮であるとは云ひ事実は遂に事実である。」と露風の意見を要約しながら、「若い批評家は近代文学の要素は偽らざる自己そのものを表すことを外にしてこれなしと云ふ立場からして誇張されたる感情と絢爛なる文学とはた又現実を外にしたる内容とを斥けて、人生の真を歌へ。今少しく内観的であれ。」（ママ）と論じたのは甚しく吾人の意を得たものである。」と言う。さらに続けて次のようにも言う。

◎成程従来の短歌は声調、文字等狭義の技巧に於てほとんど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

円熟の域に達して居つた。然して声調の美や文字の豊富や吾人を動かす力に至つては「真」そのものよりは遙に微なる力を有して居るにすぎないのだ。青年が心酔する時代は去つて青年が批評する時代に達したのではないか。

ここには、自然主義思潮を多分に吸収した短歌のあり方が説かれている。春夫の〈短歌観〉にとどまらぬ、〈文学観〉の一端も仄見える。時代思潮と深く係わる文学のあり方である。

「革命に近づける短歌」には、醒めた眼で〈人生の真〉を見ようとする態度への共感があり、むしろ反明星派風といってもいい中央文壇への着目が窺える。

一方、この短文を、新宮の短歌界のなかで捉えてみると、和貝夕潮との相異となって現われてくる。

『はまゆふ』復刊号にみられた、和貝の与謝野寛への心酔ぶりは、寛の和歌を巻頭に据えたこと、「蘇生の辞」がすでに見たように寛への讃歌（オマージュ）であったこと、さらに、

蜑の子は浜ゆふ咲ける浦にゐて父待つ吾はみ船をぞ待つ（与謝野先生の再遊を待ちて）

の歌まで詠んで、寛の再遊を心待ちにしていること、などに顕著である。

春夫の意図からすれば、寛への心酔一辺倒という形での『はまゆふ』復活は、到底満足のゆくものではなかったであろう。

『はまゆふ』二号は、一層短歌に重きを置いて、短歌はすべて活字を大きくした。第二期『はまゆふ』が、短歌中心といわれる所以はここにもある。

当時の短歌会の様子を伝える中野緑葉の回想（『朱光土』三号・大12・8）は、次のような興味ある事実を記している。和貝夕潮と佐藤春夫との確執が表面化したものとみられる。

佐藤春夫君の『かも』の言葉は、其の当時我等の師であり熊野歌壇の柱であつた和貝夕潮氏から『不真面目な言葉』として、手厳しく叱正されたものであつた。和貝氏の当時の短歌に対する見解や用語や乃至態度が、如何に厳正であり、芸術を神聖視するに熱烈であつたかがよく判る。佐藤君の『かも』は、斯くて叱正に其夜を限りとして影をかくした……

＊

「浜ゆふ」の人々の中でも新声派の影響を多分に享けた佐藤春夫、下村紅霞の両者は、次第に和貝氏の明星調の歌とは変つた新声調の歌をその各週の短歌会で発表した。其他の人々も、いつか各人各様の影響をうけて、次第に変つて行つた。従つてその折々に発表さるる短歌に対する批評見解を異にし、佐藤下村の両君は人生派の歌を楯にして明星派の歌に抗弁した為和貝氏から「君達は急進党である。吾々はランプ党で君達は電気党だ」と戒飾された結果、遂に和貝氏から破門された。破門……（ママ）今から考へるとまことに馬鹿げた事ではあるが、いかに和貝氏が熊野歌壇の権威者であり、我々に絶対のものであつたかは、この一事を以てしても推知する事が出来るであらう。

だから、結果的に『はまゆふ』が二号までで中絶したのも、中野のいう経済的事情、和貝がいう和貝自身の熊野実業新聞への入

社（明42・1）、という事情[5]の外に、『はまゆふ』内部での自己分解がむしろ決定的な要因であったといえる。

「白鳥吟社詩稿」の形での地元新聞への和歌の発表も、次第にかげをひそめ、各人各様な形で個人名で発表されることが多くなる。

春夫の場合、明治四十一年十月十五日付「熊野新報」への「紅林檎」八首が、個人名で発表されたもっとも早いものである。下村紅霞との「二人のうた」（各四首ずつ）は、十月二十二日付の「熊野実業新聞」に発表された。この頃が、中野緑葉のいう和貝からの「破門」の時期であったかも知れぬ。

この年十一月「熊野実業新聞」に、「白鳥吟社」の歌人たちを論じた「熊野歌人評論」が、三回に亘って載っている。[6]「マグネシュム等」とあって、誰の文であるか定かではないが、春夫は次のように論じられている。ただ、この「マグネシューム」ということばは、極力過去の習慣を打破し、将来に燃えるような理想を実現しようとあせっている「急進党」、つまり春夫らをあてこすったことばであったようだ。

●はるを君と愁羊君（引用者注、奥栄一）は面白い対照だ――紅、黒、強い人弱い人――はるを君は熱狂の人だ、強い反抗的性格の人だ。

△常に口痴のやうに言つて居られる「前田夕暮の歌は未成品かも知れない。然し僕は彼が好んで近代人を歌ひ美を去つて真につく其の努力が好きだ」と、然して口吟する――（ママ）

漫然と思ふのみにて心足り眼と眼あい見てよろこびし日よ　夕暮

△「近代人」――「デカダン」――この一語は以て君の歌を評すべし、「未成品」この一語は以て君の歌を評すべし。

△その未成品は貴重な未成品ではなからうか？　来るべき短歌の革新――即近代的短歌に近いものではなからう？　兎に角新らしい。

○「新」を衒ふやうな傾向は君の弊（二字不明）だ。

●彼は其「新」を大にほこつて（二字不明）る、彼は熊野の泡鳴だ。

●彼は或る一部の人から非常に愛せられる、他の多くの人からは非常にうとまれる、歌に於ても其の通りだ。

△僕が結論する、歌も人も「新らしい未成品」だ、其未成品たる○が君の君たる所以だ、好漢自愛せよ。

この批評は、当時の春夫の位置を的確に言い当てているように思われる。

「殉情詩集」に収められた幾つかの詩の背景が、この頃育まれていたことも事実であろうが、一方で、真に〈人生〉と向き合う姿勢も十分に把持されていた。『はまゆふ』編集後記での泡鳴らへの着目、三木露風の意見への同調、新声調の歌への傾斜、前田夕暮の歌の評価など――いずれも、そのまま〈反明星〉派につながる系譜でもある。

〈反明星〉の志向は、雑誌『明星』内でも進行していたことは、これまでも指摘されてきている。春夫の立場も、『明星』内での〈反明星〉に近い姿勢といった方が良いかも知れぬ。与謝野寛の、いわゆる反自然主義宣言（『明星』明41・12　広告「『明星』を刷新するに

就て」）も、そういった傾向へのまさに歯止めであったはずだ。

吉井勇や北原白秋、石川啄木らが、新詩社社友でありながらも、次第に自然主義思想の影響を受けて、各人各様に寛から離反してゆく過程は、歌人という狭い世界に充足できずに、詩や散文への移行を内に秘めていたことは確かである。

それは、またこの熊野の地で、少年春夫らが、和貝夕潮から離反してゆく過程にも、時期的にも見合っているように思われる。そこには、少年らしい〈人生〉への真剣な態度や、〈社会〉への批評が、十分に内包されている反面、中央文壇への野心も、当然隠されていたといえる。しかし、このとき春夫は、まだ〈短歌〉の世界にとどまって、短歌の革新を唱えている。

「熊野実業新聞」十二月二十日付に、「静観生」が「駄言録」を書いて、春夫を批判している。

「佐藤君の意見（即ち彼の主義とも云ふべきもの）は――一時に自分の歌に於ける趣味を発展して中央の歌壇で大ひに振はう――と云ふのじやそうナ、和貝君のは――一時的に非ずして次第々々にこれを進め田舎歌壇を賑はさう――と云ふのだ。全然意見は反対だ。」と押さえたうえで、あくまで和貝は春夫の師なのだから、師に対して自分の主義を主張するなど道にも欠ける、と説いていて、何ら根本的批判にはなりえていないのだが、最後には、「浜木綿の乱脈を見てその将来を患ふる」と結んでいる。

「熊野実業」紙は隔日刊であったから、これが発表されたのは、春夫の「革命に近づける短歌」の次号ということになる。

春夫も黙ってはいられなかった。十二月二十四日付に次の一文を書く。全集未収録、未公表作品なので、全文を引いておく。

答へざる所以、其他（一字不明）

▲前々號の本紙で靜觀子の珍〇を見せて頂いた、然し別に御答はせぬ、いやする必要を認めないのだ。換言すれば僕は遊んでる暇はあるが失敬ながら君等と下らん議論をして居るやうなそんなヒマを持たぬ――これでも文壇の新思想を知らうと努力して居るんだから。（原文ママ）

▲僕と紅霞とを同じ色だと云つたりするのは未だ善いとして夕潮氏と緑葉とを同色に見たてたり師と異つた議論をしては道にかけて居るなぞ、云ふ君の頭や又聞きの話を根據にして匿名で人を是非する態度は答へるだけの價値がないから率直に云へば僕はあれを讀んで〇笑を禁じ得なかつた一人だ。（一字不明）

▲梅田米三郎が彼の文に付いて何か書くと云つて居たが大人氣ないからと云つて僕が止めて貰つた。

▲一體熊野の歌人（？）なぞ云ふ連中に相當な短歌觀でもあるのであらうか。有るとすれば此の際大に發表して欲しいものだ。さすれば論壇が賑ふわけである。御互に進歩するわけである。

▲本月號の太陽に内藤晨露といふ人の短歌が發表されて居る。ちよつと次に紹介する。

「君、妻となれり」別れてまたあはず此一日よ心安きかな

對ひ居て殺意すら胸を打つわりなし君に涙ながるゝ（引用者注・「殺意すら胸を打つ」は、もとの内藤晨露の歌は「殺意ひたすら胸を打つ」）

「生きよ生きよ未知の友よ」と其書に博士は云へり痛く稚し

あゝさびしあらゆる人の侮を誹をうけて一日生きたし

吾等はこゝに有力なる味方をまた一人得た。〇〇時代思想は（二字不明）かくまで偽ることの出來ないものであるか。（春夫）

（全集未収録・原文のまま旧漢字使用、傍点もまま）

春夫が「有力なる味方」という内藤晨露もまた、このとき上京二年余の、前田夕暮直系の青年歌人であったことは言を俟たない。有力雑誌『太陽』に発表されたこれらの歌は、「君、妻となれり」と題された一連の二十四首で、目次にも明確に記名されていた。他に、

君妻となりし日知らぬ日の中にたづねて一日倦み果てしかななどもあり、全体的に虚無的心情が窺える。

ここにも、春夫の、一貫した〈反明星〉派の系譜への注目を証しするひとつがあるといえる。

3

『はまゆふ』三号は、明治四十二年が明けてまもなく出る予定だったのであろうか。[7] しかし、自然消滅のような形で廃刊のやむなきに至った。「白鳥吟社」の短歌詠草もかげをひそめた。かわって、個々人の歌が、連作の形で地方新聞の歌壇を飾るようになった。前年末、夕潮らによって、「うしお会」復活の試みが為されているが、長続きしなかったようだ。[8]

和貝夕潮が、「熊野実業新聞」記者として入社するのは、この年一月八日である。和貝の後進育成の役割が一応終ったといえる。

逆はであれば於かしきこともなくたゞすぎ去りぬこの十日ほど

（明42・1・28付「熊野実業新聞」「この十日ほど」一連九首）

春夫はこんな歌を詠んでいる。若い歌人たちは、各々自立の道を歩み始めたのである。

若い歌人たちはまた、新しく創刊された雑誌『昴』への投稿を積極的に始めてゆく。『昴』が単に『明星』亜流ではなかったことが、少なくとも、〈地方〉の視点からは、〈明星〉を脱皮した姿が鮮明にうつっていたのではないかという気がする。

一巻一号（明42・1）「新渡集」には、春夫九首、夕潮八首、下村悦雄（ママ・本名）四首、梅田酉水五首、坪井紫潮四首が収められている。二号は、編集者啄木が、和歌の活字を落として風当たりを強くした号であるが、「新詩社詠草」に夕潮八首、昴同人詠草「南枝集」に、春夫五首、酉水二首、奥栄一一首がとられている。三号は昴同人「三月集」に、春夫五首、悦雄二首、栄一一首が載っている。

ちなみに、春夫の『趣味』歌壇への投稿が、四十一年九月から始まって、四十二年に入っても続けられ、『新声』への掲載も四十一年十二月、四十二年一月にみえる。

このようななかで、春夫と奥栄一とは、四月五年生になった。「白鳥吟社」が解散したとはいえ、春夫らが和貝に造反したとはいえ、決定的に絶縁したわけではなかったようだ。和貝にしてみても、新しい記者生活のなかで、春夫らとの接触も続いている。

春夫らの若さや新しさという面も認めざるを得なかった。かといって、和貝の与謝野寛崇拝が、片時も揺らいだわけでもなかった。

明治四十二年六月頃、大和五条の文学雑誌『シキシマ』の支部が新宮に置かれ、「潮光社」と名づけられて、春夫も其中の一会員であった旨が、椿井艸十氏の思い出にある。（『俳句研究』昭39・7「明治の頃の佐藤春夫氏」）

氏は「号を春夫は『波留夫』と称し主として短歌を作っていた。又長詩も書いていて、自分で原稿用紙を『波留夫用箋』として作っていた事を覚えている。」と述べている。

「潮光社」の実態については不明な点が多く、椿井氏は、春夫の外に下村悦夫、坪井紫潮、中野緑葉の名をあげている。[9]

中野緑葉の回想（前出、『朱光土』三号）によれば、『はまゆふ』を失った彼らが、盛んに投稿し、坪井紫潮の奔走でシキシマ文学会支部が設けられたという。

「熊野実業新聞」に「潮光社詩稿」が現われるのは七月二十二日付。その後八月二十二日付、九月二十四日付に載り、十月の分は見当らず、十一月は最終日の新聞が散逸しているものの、それまでには見当らぬ。私の「六月頃」発足の推定の根拠もここにしか無い。ただ、詩稿に歌を寄せているのは、下村悦雄、中野緑葉、坪井紫潮らで、佐藤春夫と奥栄一、それに和貝夕潮の名が見えぬ。

夕潮は、この年十月、贈られた『シキシマ』をみて、新宮支部「潮光社」の存在をはじめて知ったという。（明42・10・24付「熊野実業」編集日誌）春夫が「潮光社」会員であったかどうかもあやしくなる。先の椿井氏の思い出も、投稿時の春夫の記憶らしくも見える。

春夫が「シキシマ」に作品を投稿した可能性は疑えぬが、若い歌人たちの間で目論まれた「白烏吟社」の再編といってもよい「潮光社」の結成に、春夫は参加しなかったのではないか。そういった結社に、もう何の意義も見出せなくなっていたのではないか、春夫にとって、短歌への執心が次第に薄らいできていることの裏付けになるのではないか、と思われる。

この年八月、与謝野寛ら一行の再遊は、久しく待ち望んでいた和貝にとって、中心になって立ち働く機会になったことはいうまでもない。実務を担当したのは、新詩社社友であった木本町紀南新報社鈴木夕雨（斯郎）と、熊野実業社の和貝とであった。

与謝野寛、生田長江、石井柏亭の三人が新宮町に着いたのは八月二十日である。[10]二十二日から五日間予定されていた「熊野夏期講演会」のためであった。あらかじめ募集していた聴講希望者が少ないために（聴講料五十銭）、翌二十一日町内の劇場新玉座で「学術大演説会」を開くことになった。（一人十銭。講演会申込み者は無料）寛らはすでに木本町（現熊野市）でも「熊野林間講習会」を終えていた。名称は異なるが[11]「同一基礎」とあるから、両町文化人が後援していたのであろう。

この講演会での春夫の演説「偽らざる告白」はとみに知られている。その内容検討は無理な事情もあるが、「傍聴記」などによれば、私がこれまで述べてきた春夫の軌跡と、同じ〈文脈〉で捉えることができるのではないか。まさに「偽らざる」告白であったのである。そこには、〈短歌〉の世界から飛び立った春夫の姿も窺

える。

傍聴記（明42・8・24付「熊野新報」）によれば、「中学時代に於ける学科成績を忌憚なく告白し、吾々の眼中には何物もない、唯其悲劇とするところは境遇にあらず性格である」とし、「吾人の信仰はといへば現実を以て充分ならずと雖も唯自己である、無理想無主義無目的で空虚である吾人は吾人の信ずるところに向つて進むのみ、自己を知る者は自己なりと結論」したという。

もちろん、ここにも自然主義思想からの影響は顕著である。春夫自身も「私の履歴書」（昭31・7『日本経済新聞』連載）のなかで、「中学校の高学年を二学年までサボリ放題に誰はばからず読んでいるうちに、いくらか文学もわかって来たような気がした。口禍事件のおかげでわたくしは偶然にも自然主義の洗礼を受け、本当に文学者になろうと志を立てた。」と述べている。

しかし、「自然主義の洗礼」は、口禍事件がきっかけではなかったろうし、必ずしも「偶然」でもなかったことは、いままで縷々説いてきたつもりである。さらに、単に、自然主義の影響だけでは片付けられぬ、「性格悲劇」を見据える堅固な「自己」を確立した姿があるようにも思われる。それが結果的に、春夫を「反抗児」に仕立ててもいったのである。

和貝と同世代の成江醒庵も、「極めて大胆なるもので虚無主義の傾向はありながら尚ほどこかに何ものかを求めつゝある形跡が見えるのである。斯の如きは到底不健全なる思想たるを免れ得ないのではあるが決して不真面目なものといふことは出来ない。」（明42・9・6付「熊野実業新聞」「学術演説会に於ける感想」）と認めざるを得ない。

しかし、聴衆の間には、成江のような物分りの良い者ばかりではなかった。まして、前日（8月20日）から、新宮中学で郡内夏期講習会が開かれていて、小学教員五十名余が参加、その多くがこの夜の講演会に顔を見せていた。

内務省直属の講師生江孝之が、郡長はじめ各町村長に迎えられて来新[12]し、二十三日新宮中学で地方改良と報徳に関する講話をしている所をみても、郡内夏期講習会の性格もわかる。

偶然とはいえ、寛一行の講演会が成されているとき、内相の地方自治刷新にもとづき、知事以下の訓令の下で、自治巡廻講演会が開かれている符合も注意しておいていいだろう。

警察署から、講師の職業や住所を、取調べのような形で、執拗に問い合わせを受けたことを、和貝が回想している（『熊野誌』七号、昭37・3「熊野文壇の回顧」）のなど考え合わせても、中学生春夫の自然主義論が、どのような波紋をなげかけるものであったかは想像に難くない。

ところで、春夫が、与謝野寛ではなく生田長江に敬服し、付き従うのは、如何なる理由からか。むろん十七歳の春夫からみて、寛三十六歳、長江二十七歳という年令的な親近感もあったろう。しかし、長江の主義主張に共鳴できる部分が大きかったからでもあるまいか。

春夫は後年、次のように長江との出逢いを語っている。（『文芸』昭31・5「対談・現代文学史＝スバル時代＝」）

ああ、それでね、その講演会の時に長江先生とぼくは肝胆相

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com